

資料館だより

Vol.46 No.4 (通巻233号)

2022.3.25(年4回発行)



静浦ホテルの絵葉書とホテルラベル

静浦志下^{ほようかん}の保養館本館の跡地に建てられた静浦ホテルは、昭和13年(1938)10月に開業しました。建設したのは清水栄藏^{しみずえいざう}とあります。清水栄藏は東京都千代田区の紀尾井町^{きおいぎょう}に住んでいた富豪で、静浦志下^{おおきたか}の大木喬任^{たけしげ}の別荘(現在のはまゆう)を、その子息から取得し、別荘としており、後にはその家族が移り住んでいました。

ホテルの建物は木造と見られ、地上三階、地下一階建てで、屋上には望楼^{ぼうろう}が乗り、屋根に和風の唐破風^{からほふ}を付け、玄関^{ひし}の底は切妻破風^{きりづまはふ}とした和洋折衷^{わようせつしやう}様の建築でした。

終戦直後に進駐軍^{しんちゆうぐん}に接收され、その後は米軍に借り上げられて下士官の保養施設として使われていましたが、昭和30年に(1955)返却され、ホテルとして再出発しました。静岡新聞の記事によれば、この時点での客室数は32室、従業員は85人、経営者は清水はるとあります。

ホテルは、昭和42年に閉館し、その後、建物は老朽化のために解体されました。

駿河湾の漁

森田 安男さんの漁話

我入道のタチ (タチウオ) 釣漁 その2

森田さんが考案したタチ釣りの仕掛けは、1本のミチナ(幹縄)にエダ(枝縄)が8~9本程度つく仕掛けでした(図1)。この方法で一度に7~8匹のタチがかかったこともあるそうです。また、この仕掛けだとエダの位置に高低ができるため、上の方でタチがかかれば落とす深さを上へ上げ、下の方でかかれば落とす深さをさらに下へ落とすといったタチがよく釣れるポイントを探りやすいという利点もあります。ミチナは深い所でも対応できるように50尋(約75m)のミチナを用意してカゴの中に入れておきます。ただ、灯りで海上に集まってきたタチを肉眼で確認できるところで漁を行うことが多く、ミチナの内、エダを結びつけた仕掛けの部分だけでも15m程度になるため、大体は仕掛けの部分だけを海に落としてタチ釣漁を行います。森田さんが考案した仕掛けによってタチの漁獲が上っていったため、我入道でもこの仕掛けがあつという間に広まっていきました。

タチ用の釣針は軸が長くまっすぐになっています。タチは歯がするどい魚で、ナイロン製の釣糸だとすぐにかみ切られてしまいます。そのため、釣針に結びつける部分の釣糸はナイロン製ではなく、7, 8cm程度ステンレス製のワイヤーを使用しており、かみ切られないようにしています(写真1)。

エサにはサバやサンマを使用します。冷凍のサバやサンマを船上で溶かして三枚におろし、太さ1cm長さ10cmぐらいの長さに切ります。身が弱くなるため必ず皮をつけて切らなければなりません。エサの長さも長すぎるとタチの口に針がかからず、短すぎても食いつきが悪いため程よい長さにしなければなりません。

船の片側、船首・船尾に1本ずつ、両側で計4本の竿を設置し、一人の漁師が片側2本の竿を担当します(図2)。竿の位置を離すことで、タチを曳き揚げる時にミチナ同士が絡むことを防いでいます。竿の先端には、エダのついたミチナを結びつけます。この時、ミチナの途中にトッタリという別の糸を結びつけて漁師の手元におきます(図3)。このトッタリを引き寄せればミチナが手元に寄ってくることになり、竿の場所へわざわざ行かなくてもいいようにしています。前後の竿から伸びたトッタリを手に持ちながら、タチがエサに食いつくことを待ちます。竿がピクピクと動いてタチが食いついたと思えば、トッタリを引っ張ってミチナを手元に引き寄せ、ミチナを手繰ってタチを曳き揚げていきます。

現在では、電動で糸を巻いてくれるリールがあるた

め、それを装着した釣竿でタチ釣漁を行っています。経済的ではありませんが、手釣りとは違って手は傷まず、力をかけなくても自動で巻き上げてくれるため、ほとんどの漁師が電動リールを使用しています。

(話：森田安男氏 昭和15年生まれ 沼津市我入道在住)

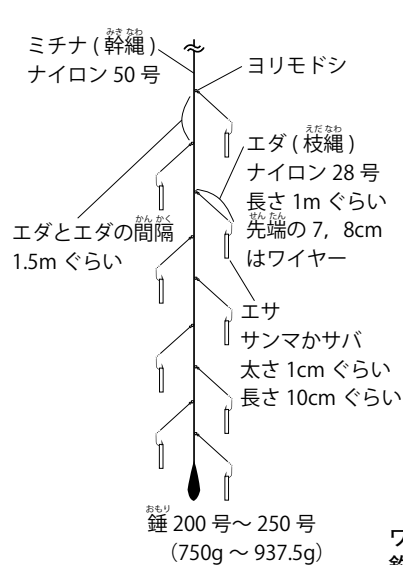


図1：タチ釣り仕掛け



写真1
ワイヤーのついたタチ釣針
釣針(縦32mm 横14mm)
ワイヤー(長151mm)
歴史民俗資料館所蔵

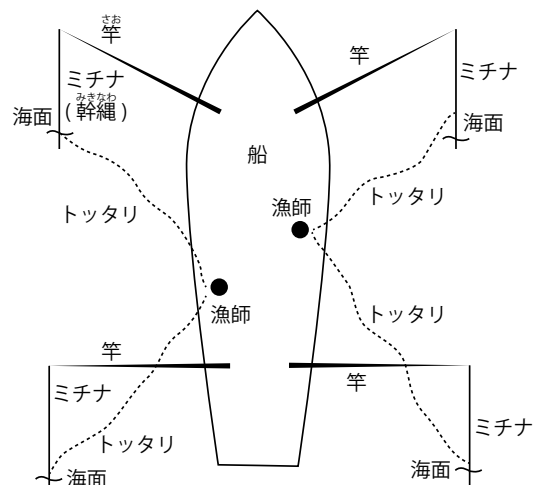


図2：トッタリ (上から)

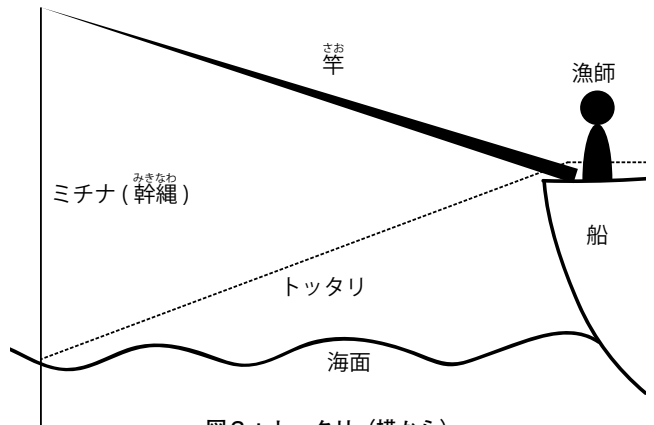


図3：トッタリ (横から)

『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

■香貫・我入道編 その4 我入道 1

●我入道の生活の舞台 我入道（ガニュード・ガニュードウ）は江戸期からの村名で、我入道湊があった。村高（石高）が少ない小村で、「元禄郷帳」37石余、「天保郷帳」「旧高旧領取調帳」ともに40石余であった。『駿河志料』には「当村より口野村に至る村々を内浦と称し、山畑が少しあるだけで、漁業を営む」と記す。安永6年（1777）の村高でも37石余、家数134であった。明治24年では戸数231、人口1,446、船252隻を数える。慶応4年（1868）の絵図で見ると、寺社では臨済宗島上寺が浜町（浜方）、隣接地に廃寺の大覚院が、八幡社は島上寺背後から後に移転、不動尊は不動岩、別称「不動山・男山」の頂上にあつた。小祠等では浜方に稲荷・天王社、釈迦院の墓地があり、「牛伏山」側に秋葉社・山神社と山宮明神が描かれている。

我入道村は、特異な「河口港」の漁村であり、狩野川沿いの河岸にかつて帯状の「集村」の形態を取り、川への依存度を高めて来た。元禄5年（1692）の『駿州駿東郡家入度村絵図』では「女山」に向かい、釈迦院・津島社前を通る道の両側に家々が並ぶ。江川沿いの低地は洪水被害があつたためか、荒蕪地として描かれている。

村高が少なく、各戸の持高も小さい。大半が畑地であり、地味もやせた5町3反6畝程度の狭小な土地故、それを補完するために半農半漁よりも漁村的色彩が強い。近世半ば以降でも男が昼夜の漁労と網・縄作りの漁業専一、女も「耕作こなし物」の合間の釣麻糸作りなど網道具の拵えの記録が際立っている。

狩野川左岸の攻撃斜面側に位置し、水深は不動岩（不動山・男山）の東際で深く、帆船の時代から十分な吃水を保ち、河口港として古くから発展してきた。前述の『駿州駿東郡家入度村絵図』で家入度と我入道を併記している点からも、カニュードの地名も香貫津（カヌキド）からの転訛であろう。



絵葉書「駿河沼津 我入道ノ景」

●深刻な津波や高潮被害 「安政の津波」による被害は、当時の総戸数110軒のうち、流失家数60軒で、流失率は実に55%であった。地元では災害に絡む「日蓮と曼陀ヶ原」の伝承や「我入道」の地名説話がある。

我入道の地は狩野川河口部の港口、川口に位置するため、洪水だけではなく高潮災害にも弱かった。西側の我入道海岸は600m程の砂浜海岸で、夏には海水浴場となって賑わう。浜辺には富士川起源の砂礫のほか、狩野川起源の小砂利が目立つ。今では高潮除けの防潮堤が構築され、階段を上らないと海が見えない。背後は砂の移動を防ぐ柵などがある「浜堤」で、一帯は牛臥風致地区に指定され、我入道公園として整備が進む。

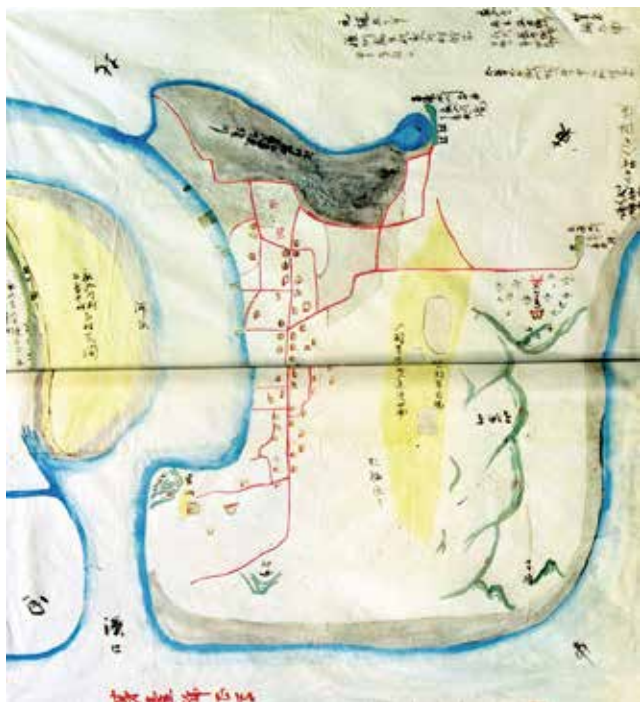
海岸の北寄りには釈迦の立像に似た「女山」（オシヤカ山とも）の奇岩がある。不動岩の「男山」と対の名称で、牛臥山と同じ海底火山の岩体を基礎とした特異な高まりである。この天然の障壁を支えとし、砂丘の様相を呈した松原の北側ではなく、松の保安林がある「浜堤」の南側の窪みを常に高潮が溢流している。

文政11年（1828）や弘化4年（1847）の絵図で「真浜」と記す浜の背後、秋葉神社北側には高潮や風害を除ける「潮風除土堤」が築かれていた。その後この人工堤防を基礎に、砂浜の吹込みで高みを増した「浜堤」の地形が形成された。元禄期の絵図では外新田「於柵通り」の南側に、「入相草苜場并我入道堤筋」、「家入度并下香貫入相草苜場」とし、入会地の草刈り場と我入道の堤の東側、芝原の荒れ地に下香貫との入会草刈り場を指定している。砂原の児童公園内の斜めの道が古い堤跡で、東側に下香貫分の飛び地があつた。

牛臥山北側の曼陀原や外新田では、このように度々高潮災害を被ってきた。文政11年（1828）の絵図では浜寄りが「砂原」、古く of 山宮、山神社の大朝神社寄りが「芝原」と区別して記載されている。「砂原」の地は曼陀ヶ原の荒蕪地で、芹沢文学館や我入道児童公園の砂地で疎林の松原一帯が該当する。「芝原」は荒れ地を開拓した疎林の松原や芝地で、後に開墾されて



絵葉書「(沼津) 我入道の景」



元禄五年 家入度村絵図 『狩野川河口域の変遷』から転載

新田の耕地となり、今や一般住宅のほうが多い。また中堤までの南北の道沿い、その西側は古くに御林であったが、松も数える程と少なく、近年では交通の障害となっている。

なお、「安政の津波」の壊滅的被害を反映した慶応4年(1868)の絵図では、砂原が植田内膳一統による「三十郎新田」の荒地、芝地は八幡社修復の免除地「八幡免」の荒地、集落背後の外新田・内新田、後の字外新田・字一本松付近も大半が荒地であり、中堤の北側には減免措置をした「見取畑」さえあった。

我入道の場合、河口部で砂の供給が少ないために砂丘は発達せず、狭い海浜から寄せた「浜堤」は貧弱であった。我入道の大半は「砂礫堆(砂堆)」の地形をなす。対岸の沼津本町や千本の地は富士川起源の砂礫が基盤にあり、砂礫堆の最上部は川寄りで狩野川起源の砂礫へと徐々に移行する。我入道でも狩野川の河口部故にまた同様である。千本砂礫州(田子浦砂丘)は観音川下流で幅が狭まり、比高も低くなっている。我入道側では不連続となるが、浜堤の下部には砂礫州が基盤をなしている。

資料館からのお知らせ

企画展「生魚走ル」の開催について

本年度の企画展「生魚走ルー沼津の海産物輸送と交易」を現在開催しています。

本企画展は、当館蔵の国指定漁具コレクション「沼津内浦・静浦及びその周辺の漁労用具」の中から交易運搬用具を紹介するとともに、沼津でとれた生魚やその加工品の流通経路や運搬方法などについて紹介するものです。

生かしたまま江戸まで鯛を運んだことや生の鮪を馬の背に乗せて峠越えし、押送船で江戸に運んだこと、甲州への海産物の輸送なども紹介しています。

今回は学芸員による展示説明会も行いました。



展示説明会の様子



企画展の展示状況展

沼津市歴史民俗資料館だより

2022.3.25 発行 Vol.46 No.4 (通巻233号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL:<https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp